

松平本『文正記』に於ける古文の使用について

橋村 勝明

一、問題の所在

松平本『文正記』の漢字字体に注目すると、所謂正字体、俗字体に加えて古文と称する古体字が使用されている。古文とは、古く中国において使用された古体の漢字であつて、秦の焚書を避けるために当時の儒者が壁の中に隠し、後に発見された漢字であるとされている。

『文正記』は、斯波氏の内紛を真名表記で描いた軍記物語で、成立は「文正元年丙戌九月晦日録焉」とあることから、一四六六年頃の作と考えられる。作者については未詳である。現存する諸本の内、松平本は最善本とされる。その奥書は次に記す通りである。

(本奥書) 文亀二年壬戌二月十七日於高野山往生院

之内十町坊書写之 良慶

(書写奥書) 斯書剗剗氏未刊之者也探度函底

他日備修史之一助爾

寛文三祀星屯癸卯六月六日如松子

松平本『文正記』の古文の数は次に掲げる六字で、延べ十八例使用されている。『文正記』に使用されている漢字の総数が三六一九字であることを考えると僅か〇・五％に過ぎないが、『文正記』に古文が使用される背景について考えてみたい。

松平本『文正記』に使用される古文の種類と用例数は次に記す通りである。

松平本『文正記』に於ける古文の用例数

現	一	以	動	居	淵	聞
古	弌	呂	通	𠂔	囷	𦉳
古文／全漢字	3／25	1／7	5／9	3／3	1／1	5／7

注 「現」は現行の字体、「古」は古文であることを示す。「古文／全漢字」は、現行の字体と古文とを足した数字を「全漢字」とし、その内の古文の数字を示したものである。

二、『文正記』に於ける古文の用例の検討

以下に、用例を記す。用例を掲げるに際しては、原本に存する読点等本論の趣旨に反しない記号は省略に従った。用例の内●が付されているものは、古文の用例であることを示す。

「一」の用例 二四例

- 雖有^ト上洛之支度^{シタク}依^テ諸一族之僉議^{ソクノ} (三才3)
- 待^{マツ}京都一注進^ヲ處國中強人與同牢人^ト四方蜂起^ニ (三才4)
- 雖小臣身^ニ最前一騎馳上可^レ謂^ツ當千^ト (四才2)
- 同心拘^ニ役處^ヲ無二無三^ニ式心防戰^ニ (四才5)
- 式々討^ツ濫觴^ニ先年兵衛佐義敏家督之事被^ニ仰付^ト (五才8)
- 清和天王廿一代後胤義建早世之后^{ノチ} (五才1)
- 義建早世之后武衛一跡欲^レ斷^ニ (五才2)
- 歷遍^ニ瀕覽^{シテ}而眇^ニ世於一塵一漚^{クニ} (六才7)
- 加之式^キ揆同意與力^ヒ最^キ眞^ニ輩者 (七才3)
- 山名細川土岐一色自餘^{ソノ}面々^ノ近習外様不^レ屑^{モノ、カストモ} (七才4)
- 高構^{クハ}勢樓^ヲ一目直^ニ下^ニ洛中邊土^ヲ (七才1)
- 卒^ニ述一章^ヲ寔咲具也 (八才8)

- 八九月交近日一定兩佐々木復承^{マダテ}大將^ヲ (二〇才2)
- 乍^ト去于兎^ト于角^ト一所御伴^ニ申事簡要存計也^{トモ} (二二才7)
- 聽^キ此^ニ一言御一家諸傍輩自餘^ノ軍勢兵卒^{ソク} (二二才1)
- 同六日夜一揆大名同心密談^ニ竊^ニ企隱謀^{ツインホウ} (二二才7)

- 義廉者義敏之質^{アイデ}土岐一色貞親質^ハ (二二才3)
- 一々手賦^{テクハリシテ}剽劫^ヲ追落^ヲ義敏貞親以下之纔臣等^{サンシンヲ} (二二才3)

- 届^{イタルマデ}於禁裏仙洞神社佛寺僧房民屋^{キンリセントウ}不殘^ニ一字^モ却^ニ燒而^{シテ} (二三才1)
- 取^テ於一事兩樣諸公事^ノ一 (二四才4)
- 爲^ニ己^ノ一人之罪科^ト藏^シ身晦^ヲ跡^ヲ (二四才5)
- 悲矣^{カナシキカナヤ}平生一念失^ノ受^ク此百年之譴^ノ (二四才7)
- 特憑^{コトニ}上意^ヲ仰^フ神慮迄^ヲ于昨日今日^ニ (二五才5)
- 誠諺^ニ千兵易^{ハヤシ}得^レ一將難^{ハキハモトメ}求者^ニ是也 (二五才6)

「以」の用例

- 概^{ヲウムネ}神代^{ヨリ}呂來侍^{コノカタ}凡下區別有^リ之^レ (二一才3)
- 是以天下無^ク安^{コト}國家不^ニ穩^{フタヤカ} (二二才1)
- 是以甲斐美濃入道常治伺^{ウカ、イ}上意^ヲ立^テ於庶子義敏^{ソシ} (二二才1)
- 是以邊土畿内僧尼女童^{マデモ}者亦不足^レ言^{フニ} (七才5)
- 自今以後身體各可^レ爲^ニ隨意^ニ之旨被^レ仰 (九才5)

○一々手賦^{テクハリシテヲヒヤカシテヲイ} 剽劫^{ヲトス} 追落^{ヲトス} 義敏貞親以下之纔臣等^{サシシシラ}

(一二三才4)

○是以國々家々婦女等日夕倚門待^{ヨリ} 郎之歸駕^{ニマツ}

(一二三ウ3)

「動」の用例

○文正元稔洛中躁動^{サウトウカンケンワ} 漢言倭語混雜^{コンサウ} 吏記^{クツカエス}

(二ウ4)

●風^{ホウカニキクヨリ} 通從^{コロ} 文正元年丙戌七月中旬比^{ラク} 雒中躁運覆^ニ

天地^チ

(二ウ5)

○閨^{トキノ} 音螺鐘^{カイカネノコエ} 聲日夜無^{ナク} 止^{ヤムコト} 震動^{フイサウトウテンイッレ}

(三才5)

●当代山名陸奥守氏清明德之乱猥雜^ニ 運轉^ニ 孰^ニ 與^ニ 之^ニ

(五才4)

●其外畿内遠國忽劇狼籍併^{ヨテ} 絲^ニ 彼三寸舌^{ノニ} 一^ス 通^ス 搖六十餘州^ヲ

(八才7)

○生憎^{アナニクヤネタイカナウタテンキフルマヒカナ} 不分^ノ 疎薄^ノ 舉動^{ハツカノヨウチンハ} 哉^{ツクンシフニ}

(八ウ1)

●帳中讒柄^ノ 通^ニ 天地^ニ 幕下妖塵滿^ニ 群州^ニ

(九才2)

●下知成敗詐^{イツハテト、ノヘ} 調^{ヒヤウヲ} 衆評^{トウ} 一^{ヨウシラク} 通^ニ 搖^ニ 洛城^ニ

(一二三才4)

「居」の用例

●居^{スエ} 於^{ケイコヲ} 警固^ヘ 構^ニ 於^{クイサカモキシ、カキ} 亂株逆木^ヲ 雉^ニ 雉^ニ 等^ニ

(三ウ2)

●造次顛沛^{テンハイシン} 寢^{キキヨヤリ} 奥起^{イキトリリヲナクサム} 屣^ヲ 遣^ニ 憤^ニ 慰^ニ 思^ニ

(六才5)

●彼方牢人^{ソロハク} 屣^{タムロスト} 多雖^{レテ} 屯^{ニラマレツハメ} 見^{ヲタチマチニタノミ} 瞰^レ 縮^レ 身^ニ 乍^ニ 仰^ニ

上意^ノ

(七ウ2)

「淵」の用例

●淵^{ナマシイニ} 鼯^{ミスク} 負^テ 者^ヲ 坐^ニ 々來抱^{タイタテ} 石淪^{ヲシツム} 困^{フチニタメシ} 樣^ニ 也^ニ

(八才4)

「聞」の用例

●風^{ホウカニキクヨリ} 叢^ニ 從^ニ 文正元年丙戌七月中旬比^{コロ} 雒中躁運覆^{クツカエス}

(二ウ5)

●叢^ニ 此雜說雖^ニ 有^ニ 上洛之支度^{シタク} 依^テ 諸^ニ 族之僉議^{ソクノ}

(三才2)

○聞^テ 此樞機^ノ 幕^{ハツ} 下^{カラウ} 郎從^{ハウハイブ} 傍輩^{クヲモト} 曲兒^ヒ 侍相共議^{ニシテ} 曰^ニ

(五ウ5)

●臻^{イタルマデモ} 于^ニ 遠國之夷^ノ 叢^ニ 傳^テ 彼^ノ 仁威勢^ヲ

(七ウ6)

●可^レ 被^ニ 指寄^ミ 雜說^ニ 有^ニ 其叢^{キコヘ} 矣^ニ

(一〇才4)

●今出川殿將^ノ 上意^ヲ 可^レ 有^ニ 御生涯之趣^{ガイ} 有^ニ 其叢^{キコエ}

(一二三才2)

○盡^{コトククコ、ニ} 肆^ニ 馳集軍兵^ル 聞^{キ、} 得^テ 狼烟^ヲ 息^ニ

い。

右に掲げた用例を見る限り、用法上の差異は指摘できない。

三、漢字表記文との比較

『文正記』に於いて古文が使用されるのは、真名表記であるという表記に起因するものであるのか、室町時代に成立したという時代的なことであるのか、或いは書写者の問題であるのか、様々な要因が想定できるが、古文使用の背後について考察するためには、それらを一々検討しなければならぬ。

まずは、真名本であるという資料的な性格による漢字字体の使用ということが考えられる。そこで、松平本『文正記』の別本である書陵部本『文正記』⁽¹⁾ではどのような漢字字体が用いられているのかについて、確認をしておく。

書陵部本『文正記』について古文の使用状況を確認すると、松平本に於ける古文の用例に対して、書陵部本の漢字字体は次の様になっている。

	一	以	動	居	淵	聞
松平本	3	1	5	3	1	5
書陵部本	3	0	0	3	1	5

注 数字は古文の用例数を示す。尚、用例の場所はそれぞれ対応しており、書陵部本独自の古文の使用例は認められない。

右表より、古文が使用されている箇所が「以」「動」の用例を除けば、非常に良く対応していることから、伝本の個別的な古文の使用ということではなく、『文正記』の漢字の使用法ということになるようである。又、漢字毎に見てゆくと、「以」「動」の二字が書陵部本では現行の字体になっている。

次に、他の真名本での古文の使用状況について確認する。

	一	以	動	居	淵	聞	
妙本寺本 曾我物語 (2)	556	155	21	108	11	344	
大塔物語 (3)	87	19	5	8	7	11	
応永記 (4)	64	7	0	0	0	4	
豆相記 (5)	24	9	0	14	0	1	
湘山星移集 (6)	33	1	1	3	0	1	

右の表中の数字は、当該資料に於いて用いられた漢字の数である。これらの内、古文の用例は一例も存しない。従って、『文正記』に用いられる古文は、真名軍記一般に認められる漢字字体ではない。

以上、『文正記』と同様の真名軍記について、その漢字

字体を調査したところ、古文は認められなかった。このことから、漢字表記文の問題ではなく、又真名軍記の問題でもない、『文正記』の個別的な漢字使用上の問題であることが判明した。

真名軍記に認められないとすると、何故『文正記』に於いて使用することが出来たのか、又その学問環境は如何なるものか、ということが問題となつてこよう。そこで、次に古文の来歴に就いて検討する。

四、古文の来歴

古文がどのような経緯を辿つて松平本『文正記』に用いられるに至つたのかについて、それ以前に成立した資料に基づき確認をする。

i 漢籍に於ける古文

抑も古文がどのようにして日本に伝えられたか、ということについて考えるために、まずは中国側での広がりについて考えてみたい。但し、古文全体について検討することは不可能であるので、先に取り上げた六種の漢字についてのみ検討することとする。

中国での古文注記が存する字書としては、『説文解字

注』が存する。又、古文そのものに関わる字書としては、『汗簡』⁽⁷⁾、『古文四声韻』⁽⁸⁾が知られる。特に『汗簡』、『古文四声韻』の二書については出典注記が存し、その漢字字体の掲載資料を確認することが出来る。⁽⁹⁾次に注記の表を掲げる。

古文字書『汗簡』『古文四声韻』に於ける出典注記について

	一	以	動	居	淵	聞
段注説文小篆	○				○	
汗簡	古尚書			説文		古尚書
古文四声韻	古老子	古漢書	崔希裕纂古	崔希裕纂古		古老子、古尚書

※○は『説文』に記述が存することを示す。『汗簡』『古文四声韻』は出典注記を示す。

右によると、古文尚書、古老子、古漢書、崔希裕纂古⁽¹⁰⁾、説文にその漢字が掲載されていることがわかる。これらの書目が全て日本に招来されていれば、古文も同時に入ってきたと考えて良いが、この内『日本国見在書目録』⁽¹¹⁾にその書名を確認することが出来るのは、『古文尚書』のみである。しかしながら、『汗簡』『古文四声韻』に出典注記が

存しないということが、その資料に漢字が存しない、ということを意味しない。

これらの他、日本において古文が使用された資料として夙に知られているのが『古文孝経』である。『古文孝経』⁽¹²⁾『古文尚書』⁽¹³⁾について、右の六字について確認したところ、『古文孝経』に「以」「居」の二字、『古文尚書』に「以」の用例を確認することが出来る。

『古文孝経』、『古文尚書』の二書が日本において如何に伝えられたのか、ということについては、その奥書によってみると、清原・中原の明経道二家によって伝えられたことが知られる。⁽¹⁴⁾その訓読方法は、明経道の内部で秘伝とされてきたことが窺えるが、次に古辞書によって見る限りに於いては、漢字に関しては広く認識されていたものと考ええる。

ii 辞書に於ける古文・古文注記

観智院本『類聚名義抄』と易林本『節用集』とについて六漢字の注記の有無について纏めると左の表のようになる。ここでこれらの古辞書を取り上げるのは、伝統的な漢字字体に対する認識（観智院本『類聚名義抄』と、同時代的な認識（易林本『節用集』）とについて確認するためである。

観智院本『類聚名義抄』に於ける古文注記

	一	以	動	居	淵	聞
注記	古式			尻正 居古	困古淵字 又俗尿	𪛗キク
所在	佛上七三7			法下八九5	法下八三6	法下三七3
備考	漢字アリ、古文注記アリ	漢字ナシ	漢字ナシ	漢字アリ、古文注記アリ	漢字アリ、古文注記アリ	漢字アリ、古文注記ナシ

易林本『節用集』⁽¹⁵⁾に於ける古文注記

	一	以	動	居	淵	聞
注記		以吕同			淵困同	𪛗聆聞 𪛗同
所在		五九一2			五〇七4	五五一3
備考	漢字ナシ	漢字アリ、注記アリ	漢字ナシ	漢字ナシ	漢字アリ、注記アリ	漢字アリ、注記アリ

右の表から、観智院本『類聚名義抄』に於いて「一」「居」「淵」に於いて「古」注記が存する。又、「聞」に注記は無いもののその漢字字体が記載されている。従って、広く使

用されることはないが、辞書レベルの知識として認識されていたものと考えられる。易林本『節用集』に於いても、古文であるという認識についてはその記載が無いので確認できないが、同字である旨の記載が認められる。但し、「聞」の掲載方法に注目すると、「聾」字は「聴」「聆」「聞」と同レベルで認識されていたのでは無いことが窺える。但し、「同」による注記が全て古文であるかという点、他の例も参看すると、必ずしもそうでないということがわかる。

漢籍と古辞書との記載から、古文を使用することが出来るのが、必ずしも明経道の博士に限らないが、一般的に認識されていたとは認めがたく、相当な教養を持つ者にその使用が限られたのではないかと考える。

五、書写者福住道祐について

先に古文の使用は『文正記』の個別の問題であることを指摘したが、それが成立時点の用字であるのか、或いは書写時点での用字であるのかについては慎重に検討しなければならない。石井由起夫氏の説⁽¹⁶⁾に従うならば、諸本同じ漢字字体を使用するという点で、成立時点の漢字使用ということになるが、今ここで松平本『文正記』の書写者である如松子（福住道祐）について検討してみたい。

福住道祐は、慶長末（一六一五）年頃生く元禄五

（一六九二）年頃没の人物で、著書に『大阪御陣日記』『種玉庵宗祇伝』『せきかはら物語』『宗長居士伝』『十河系図』『存心軒書籍目録』『東帰稿』『梅林碎金集』『万家系譜』『森系図』『吉岡伝』等があり、又松平本『文正記』、加美本『応永記』等を書写している。人物については、左に引用する記載が見られる。

「戦国時代の人の伝記や歴史に興味を持ち、その資料となるべき系譜や戦記の類の蒐書に努めた。自編の『存心軒書目』（貞享元年（一六八四）成）には五百余部の蔵書が記されており、多数の希本を所持するに至る。医学よりも伝記・歴史の方面で知られ、家譜・系譜の作成修補を依頼され、延宝七年（一六七九）刊『難波鶴』には「文字知り」として道祐の名が刻されるまでになった。」（『日本古典文学大事典』市古夏生項目執筆）

「文字知り」ということが、どのような意味を持つのか、ということが問題とはなるが、仮に古文に対する知識を指しているとする⁽¹⁸⁾ば、書写の段階での標準字体から古文への字体の変更の可能性も指摘できよう。しかしながら、真名軍記を書写する内に身につけた知識であるということも考えられ、その何れを決定することは出来ない。福住道祐書写の他の真名軍記等を検証することによって手がかりが得られようが、今後の課題としたい。⁽¹⁹⁾

六、まとめと課題

『文正記』に用いられた古文は、真名本の用字ではなく、『文正記』独自の用字であることが判明した。今回の考察に於いては、僅か六種の漢字を考察対象とし、古辞書によって認識のレベルが現行の字体と異なることを先に述べたが、古文という漢字字体の体系で捉えて良いかどうか、ということにまず検討を要する。

例えば、「𠂔」は「時」の古文であるが、「𠂔」は訓点資料の奥書等に見られ、また江戸時代に至っても刊記に用いられる。極めて限定的な用法に限られていたのかどうか、ということについては尚検討の要するところであるが、若しこのことが認められるとすれば、古文という文字体系として認識されていたのではなく、個々の漢字の使用の問題であることが看取される。

本発表では古文という文字体系として捉えるのではなく、個々の文字使用の問題として検討したのであるが、それは右の理由に基づく。

しかしながら一方で、所謂古文と称される漢字がどのように享受され使用されてきたのか、という問題が残されていることは事実である。今後の課題としたい。

注

- (1) 明和八年の書写奥書あり。石井由起夫氏は、「校本『文正記』と解題」(北海道説話文学研究会編『中世説話の世界』笠間書院、昭五四年四月)において、『文正記』を大きくABの二グループに分け、松平本と書陵部本とを別グループに所属させている。
- (2) 山岸徳平・中田祝夫解説『真名本曾我物語』勉誠社、一九七四年一〇月
- (3) 広島大学図書館蔵本による。
- (4) 朝倉治彦著『古典資料7 応永記・明德記』すみや書房、一九七〇年。成立・作者ともに未詳。朝倉氏蔵本は、寛文元(一六六〇)年写。
- (5) 聖藩文庫蔵本、紙焼き写真による。
- (6) 聖藩文庫蔵本、紙焼き写真による。
- (7) 北宋初(九六〇)年、郭忠恕著。『四部叢刊廣編一〇』による。
- (8) 一〇四四年、夏竦著。『四庫全書 一二四 經部』による。
- (9) 城南山人編『古代文字字典 別巻古文編』マール社、二〇〇三年八月
- (10) 『古老子』、『古漢書』、『崔希裕纂古』の書目については未詳。
- (11) 『日本国見在書目録』(名著刊行会、一九九六年一月)による。
「(合点) 古文尚書十三卷 漢臨淮太守孔安国注／古文尚書十卷 陸善経注」(三丁オ)とある。
- (12) 猿投影印叢刊第十輯『古文孝経』(昭四一年六月)による。

(13) 天理図書館善本叢書漢籍之部第一卷『古文尚書 莊子音義』(八木書店、昭五七年一月) による。

(14) 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』(東京大学出版会、一九六七年三月) 付録「漢籍古点本奥書識語集」による。

(15) 天理図書館善本叢書和書之部第二十一卷『節用集二種』(八木書店、昭四九年一月) による。検索に際しては、今西浩子編『易林本節用集漢字語彙索引』(和泉書院、二〇〇〇年一月) を利用した。

(16) 石井由起夫「校本『文正記』と解題」(北海道説話文学研究会編『中世説話の世界』笠間書院、昭五四年四月) に於いて、親本から松平本と書陵部本とが別系統で伝えられたとする。

(17) 『日本古典文学大事典』市古夏生項目執筆による。

(18) 福住道祐が『文正記』を書写したのが寛文三(一六六三)年で、『難波鶴』は延宝七(一六七九)年の刊行である。尚、「文字知り」ということに関して、市古夏生氏は、書道を指しているのではないとした上で、「道祐の志は、まさに紀伝学を意味するとみてよからう。そして「文字知り」とは紀伝、歴史に詳しい人物に対する形容と考えるのである。」(『近世初期文学と出版文化』二四七頁、若草書房、一九九八年六月) と述べている。

(19) 福住道祐書写の軍記物語としては、加美本『応永記』がある。その本文は『室町軍記総覧』(古典遺産の会編、明治

書院、一九八五年一二月) に掲載されているが、翻刻のため漢字字体までは確認出来ない。又、漢字片仮名交り表記文の為、真名本とは別に考えなければならぬかもしれない。

(はしむら かつあき 本学助教授)